２０２１年４月

今月の新着図書から

伊藤亜紗『ヴァレリー　芸術と身体の哲学』（講談社学術文庫，2021 年）

高等科図書主任
林　知宏

今回取り上げるのは，20 世紀前半のフランスを代表する知識人ポール・ヴァレリー（1871-1945）をめぐる研究書である．ヴァレリーは詩人・作家としての著作（『若きパルク・魅惑』（みすず書房），『ヴァレリー詩集』，『ムッシュー・テスト』（ともに岩波文庫）等々）が何より有名である．ただその関心領域は，哲学，自然科学，数学など多岐にわたる．いまや日本では称せられることの少ない「知識人」という名にまさしくふさわしい人物である．ここで紹介する著作で作者は，ヴァレリーの芸術哲学，特に詩を作るという行為に着目し，身体論と接続することでユニークな論を展開している．詩というのは元来言葉をあやつる行為であり，いかにも身体の動作と無関係なようだが，なぜ身体と関連するのか．一体だれの身体なのか．作者か，読者か．まずは興味が自然に引き寄せられる．

伊藤亜紗によれば，ヴァレリーにとって詩＝作品は，「読者を『行為』させ，身体的諸機能を開拓するという『大きな目的』を持った『装置』である」（76 頁）という．この作者は，美学，現代アートを専門にする研究者だが，もともとは生物学を専攻しようとして，いわゆる理系の領域に身を置こうとした人物である．少し異色の経歴が独自の視点をもたらしていて，私は新鮮であると感じた．

ヴァレリーは刊行された著作（翻訳は『ヴァレリー全集』，『ヴァレリー集成』（ともに筑摩書房），『ヴァレリーセレクション』（平凡社ライブラリー））とは別に，毎日の日課として書き留めた膨大な手稿群もある（『カイエ』と称される．一部は原文，翻訳（筑摩書房）ともに刊行されている）．そうしたヴァレリーの思考の跡を丹念に追いながら，言語哲学から詩論へと，ヴァレリーの創造に関する独自のモットーが紹介され，分析される．「動詞中心主義」という発想はその一例である．ヴァレリーが『カイエ』に記した言葉，

「文は動詞が作るものである」（Les phrases sont l’œuvre du verbe）．

が本文中に引用されている（105 頁）．ヴァレリーの詩を読む読者には，身体的な感覚を伴う世界の表現を通じて，感覚可能な世界と身体で捉えられる外的な事物，そして心的な世界との懸け橋が生まれるという．ヴァレリーの言説を借りた作者の身体表現論として，ちょうどわれわれがスポーツ観戦をする際との意外な類似性を見いだせるのではないか．こうした点が面白いと思う．ただ，読者の側ではなく，作者の身体と創作とはどう関係していくのか．素朴な疑問が生じてくる．伊藤亜紗氏には，より近作に『手の倫理』（講談社選書メチエ，2020 年）があり，触覚を通じた人間関係の探究にフォーカスした論考もある．より発展的な成果として捉えるべきものであろう．どちらも一読に値すると思う．